

「私にとって仕事とは～進んできた道」

今年担当しました29期は、大変仲の良い学年です。私たちの代は、まだ3分の2が男子学生でした。それでも女子は強くたくましく、男子は賢くやさしく… 今も国内外で活躍している多くの方々を全員ご紹介できないのは残念ですが、今回のパネリストは素晴らしく生徒の皆さんの心にきっと残る時間になったと思います。そして在学中は一部の人としか関わられませんでした。友人の輪は今なお広がっており、西高時代の財産は友人たちでもあると嬉しく思っています。

<岡田理樹：弁護士>

日本やアメリカで実務を経験し、日弁連の事務次長・副会長なども歴任。多少は、個人や社会の問題解決に寄与してきたと思います。弁護士は「社会生活上の医師」と言われ、多種多様な問題に直面します。今のうちに、何でも経験して吸収しておくことをお勧めします。

<有賀 誠：日本M&Aセンター常務執行役員人材ファースト統括>

生産・経営・人事と多くの仕事や多くの人と関わり、ライブハウスを持つなど仲間とともに夢を叶え、大好きな海の近くで志ある人たちと過ごす時間も持てるようになり、悔いなしです。「やりたいこと = 志×情熱」その実現のために全力で頑張りたいと思います。

<大澤(寺田)真理子：湘南鎌倉人工関節センター麻酔科部長>

麻酔専門医になって若いうちは専門医合格が目標ではありましたが、今は毎日が小試験だと思い安全で確実な麻酔をするつもりでいます。周囲に信頼してもらうことも大切なので、丁寧に日々の仕事に向き合うつもりです。

<小林宏司：東京都写真美術館副主幹 写真映像文化振興支援協議会常務理事・事務局長>

小さな頃から興味があったデザインを仕事にしたのは、西高の恩師の勧めからです。苦しみながらも、0から1を生み出す大きな喜びも味わいました。西高で出合ったフットボールとの関わりも今も続けており、自分にとってはそれも大事な仕事です。誰かのために何かをすることは充実しており失敗しても長く続けることができる、そのことを覚えてほしいです。

<高原明生：東京大学公共政策大学院教授 JICA緒方貞子平和開発研究所所長>

仕事に対しての突破口となったのは、バックパッカーの旅で得た生きる意味・人と関わる意味でした。大学の恩師の「三つの価値」(平和価値・物質価値・アイデンティティ価値)も、国際開発を自分のアイデンティティにしようと考えたきっかけです。教員や研究者としての仕事は面白く、仲間にも恵まれ、今また国際開発に関わる仕事にも従事できて、微力ながら尽くしたいと思っています。

<長谷川(倉員)正江：日本大学生物資源科学部・一般教養教授>

西高時代も大学時代も、「自由」の一語に尽きます。高3の頃には、日本近世文学を研究したいと決めていました。仕事は多少遠回りをしましたが、その分経験も積み、しっかり研究ができたので良かったと思っています。現在、学生の国語力の低下が課題だと思っています。好きなことがあるのは幸せです。

